

無能な聖女なのでもう会えないと幼馴染の皇子に告げたら、  
「清らかじゃなくなればいいよね？」と聖印の上に淫紋を刻まれて  
あまあま溺愛えつちされました

「セーラ、城下町に新しくできたパティスリーのケーキ、侍女に頼んで買ってきてもらったんだ。君が好きかと思って。」

「ありがとうございます！クラウド様。」

月に数回設けられている皇太子と聖女の面談。流行り病や災害など国政に関わることを次期皇帝となる第一皇子と聖女が話し合う公式の場。

しかし、堅苦しい政治に関する話を終えてしまえば、そこから先は幼馴染同士の気楽なお茶会の時間になっていた。

「…っ！とても美味しいです。」

「良かった。君が喜んでくれて。」

クラウドはふわりと優しく微笑む。

陽の光を反射して輝く金色の髪、サファイアのような美しい青色の瞳。アルスマリア帝国第一皇子クラウド。誰もが見惚れてしまうその美しさはまるで天上人のようだった。

（クラウド様のこの笑顔も、今日で見納めになるんだ…）

そう思うと、セーラは胸をギュッと締め付けられるような寂しさを覚えた。先程まであんなに美味しかったケーキの甘さもすつと遠のいていく気がする。このまま何も言わずにいつものように他愛もない話をして過ごせたらどれだけ良かっただろう。

（…どうやって切り出そう。）

セーラが俯いて考えていると、セーラ、と不意に名前を呼ばれた。

「僕に何か言いたいことがある？ 何か言おうか迷ってる時、髪を触る癖、あるでしょ？」

「…えっ？」

クラウスに言われて初めて、セーラは自分の指先が長い銀髪を弄んでいたことに気がついた。

（…今日言うって決めたんだ。私はこの国の聖女なんだから。）

セーラは小さく息を吸い、覚悟を決めて顔を上げた。

「クラウド様、今日でお会いするのは最後になります。」

セーラがそう言った瞬間、紅茶のカップを持ち上げようとしていたクラウドの手が止まった。

「……最後って、もう会えないってこと？」

クラウドは穏やかな声で聞き返してきた。しかし、その手が微かに震えていることに気がついて、セーラの胸がズキッと痛んだ。

「神殿で厳しい修行を受けることにしたので、それで…教会の内部の方以外と

はお会いしないことにしたのです。面談の中止についても正式に連絡が行くかと思いますので…」

セーラはできるだけ平静を装って言葉を続ける。半分は嘘だ。

セーラがうまく力が使えないのは俗世、とりわけ異性に心を乱されているからかもしれない。神殿に籠って修行に励み、皇子を含めて男性とはもう会うなと司教からキツく言われたのだ。

「…司教に何か言われた？」

凶星を突かれてセーラはびくつと肩を震わせた。

幼い頃からの付き合いなのだ。クラウドスに嘘は通らない。

「…実は私の力がうまく使えないのは、異性に気を取られているからではないかと指摘をされて…それで神殿に籠り、もう異性には会うなと…」

「そう…分かるよ、セーラはこの国の聖女だから…」

クラウドスは寂しそうに笑った。しかしその宝石みたいな青い目は少しも笑っていないかった。

（クラウドス様、分かってくださったの…？）

カタンと、乾いた音を立てて紅茶のカップが机に置かれた。クラウドスは立ち上がってセーラの方へ歩み寄ってくる。

「クラウドス様、それではそういうことですのでわたしはそろそろ…」

言いかけたセーラの言葉をクラウドスは遮る。

「ねえ、セーラ。初めて会った時のこと、覚えてる？ 君はまだあの頃、城の文官の父君について城に遊びにきた普通の女の子で、会うたびに僕らは一緒に夢中になって遊んだよね。」

「はい、そうですが…」

（クラウド様、どうしてそんな昔の話を…？）

コツ…コツ…とクラウドスの靴音が近づいてくる。

「遊んでる最中、僕が怪我をした時に、初めて君は治癒の力を発揮して、聖女

の才能を見出された。でもね、あの頃から僕にとって君はずっと『この国の聖女』ではなくて、セーラだ。」

クラウドの声は穏やかなままだった。それなのにその表情から少しずつ笑顔が消えていく。

「僕はずっと嫌だったんだ。君の中で一番大切なことはいつでも立派な聖女になることで、会える時間はどんどん減っていく。それでもずっと我慢していた。それなのに、今度はもう会えないだって？」

靴音が止み、セーラの目の前でクラウドは立ち止まった。

セーラは思わず立ち上がろうとしたが、クラウドにふわりと肩に手を置かれてソファに戻された。

「じゃあいつそ…清らかじゃなくなれば、僕だけのものになってくれる？」

「……クラウド様？」

一瞬、何を言われたのか理解できなかった。セーラは無意識に後退りして、ソファの背もたれに身体がぶつかる。初めて、クラウドのことを怖いと思った。

「クラウド様…きやつ！」

身体がふわりと浮いた。

クラウドがセーラの背中と膝の下に腕を入れて、お姫様抱っこの体勢で軽々と持ち上げたのだ。

「クラウド様！？下ろしてください！」

「聖女をやめて僕のものになって言っても君は聞かないだろう？だからもう、僕も我慢しないことにした。」

クラウドはベットのの上にセーラを下ろすと、覆い被さるように自分もベッドの上に上がってきた。

「まずは君の聖印からどうにかしようか。安心して。今日君が何か言い出す予感はあるから、人払いを済ませてあるんだ。」

クラウドはそう言つて人形みたいに綺麗な顔でにつこりと微笑んだ。

「ねえセーラ、どこに聖印があるのか、聞いてもきつと教えてくれないよね

「？」

聖印は聖女の証。首の少し下の胸元にあり、普段は服で隠れている。

（クラウド様、どうしてそんなことを聞いてくるの？ 答えたら、聖印を見られてしまうの……？）

セーラが困惑して答えられずに黙っていると、クラウドは息を吐いた。

「仕方ないね、だったら僕が自分で探すよ。」

クラウドがセーラの白い法衣に手をかける。まだ誰の熱も知らない純白な法衣。

「首にないのは知ってる。服で隠れてみえない場所だよね？」

「おやめください！ クラウス様……！」

セーラは言葉でやめて欲しいとお願ひすることしかできない。どんなに氣心が知れた相手だとしても相手は皇子だ。手を振り払うことはできない。

「ごめんね、セーラ。もう二度と会えないなんて言われたら僕も手段を選んでいられないんだ。」

クラウスは普段は穏やかで優しいけれど、いざとなれば皇子として冷酷な判断も躊躇わない。今のクラウスはまさにその顔をしていた。

法衣が肩からずり下ろされて、胸まで露わにされる。

「あ……そこは……っ…」

「…見つけた。」

セーラの首元の少し下、花の蕾のような形をした淡く白い光を纏う聖印があった。本来の聖印は花の形をしているらしいが、セーラの聖印は力が弱いせいか、蕾のままだった。

（あっ…クラウド様に見られてしまった。私の未完成の聖印。それに服も脱がされて…）

「君を縛りつけているこの聖印を僕が上書きしてあげる。」

クラウスはそう言うと言わくからガラスの小瓶を取り出した。中には何やら鮮やかなピンク色をした液体が入っている。

「クラウス様、それは…？」

「隣国から取り寄せた薬だよ。強いて言うなら君の意思を甘く溶かす薬かな？ 安心して、毒ではないから…」

クラウスは優しい声で、少しも安心できないことを言う。

クラウスが小瓶の蓋を開けて聖印の上に液体をとろおっ♡と垂らした瞬間、ひやりと冷たい感触がしてセーラは小さく声を上げた。

「…っ！ふあっ！」

クラウスはそのまま液体をセーラの肌の上に広げながら、ハートマークのよ  
うな模様を指で描いていく。

「クラウス様、何をっ！？ おやめください！」

「ごめんね、ちょっとだけじつとしてて。」

とろみのあるその液体を肌に塗り広げられる感触がくすぐったい。セーラは  
思わず身を振ってしまいそうになるのを堪えた。

「こんなものかな…」

クラウスが指を離れた瞬間、ずくりとセーラの下腹部が疼いた。

「…っ！」

（なにっ？ お腹の下が熱い…？）

「どうかな？ セーラ。身体に変化はあった？」

クラウスは指ですっっ♡すっっ♡とたった今セーラの肌に刻んだ紋様をなぞる。

「…っ♡んっ♡んっ♡」

（やだっ♡そこをなぞられるとゾワゾワして声が出ちゃう♡）

「…よかった。きちんと効いているね。」

「クラウド様、それは一体何なのですか…？」

「これはね、君が気持ちよくなってしまう魔法の印だよ。有り体に言えば淫紋だね。」

「…なっ！？消してくださいっ！さつきから身体が変で…」

「ごめんね、それはできないんだ。君が僕に二度と会わない、なんて言わなければこんなことをしないでよかったんだけど…」

「…っ！」

セーラはクラウドにそう言われて言葉に詰まる。セーラとクラウドは幼い頃からの仲だ。一方的にセーラがもう二度と会えないと言い出して、クラウドを傷つけてしまったのは事実だろう。

「ねえ、セーラどこから可愛がつてあげようか？ 耳？ 唇？ 胸？」

すくっ♡と淫紋をなぞる手を止めないまま、クラウドが尋ねてくる。一つ一つ身体の場所を言われると、そこに触れられることを嫌でも想像してしまう。

（クラウド様のあの綺麗な指でそんなところ触られたら…）

ぶわわつとセーラの顔が赤くなる。今すぐやめてもらいたいと思うのに、淫紋を刻まれて熱を持った身体は、クラウドに触れられることを期待し始めていた。

「今考えたでしょ？ 僕に触られたらどんな風に可愛い声を出してしまうか…

」

クラウスは整った顔に少し意地の悪い笑みを浮かべる。

「そうだね…キスからにしようか？」

「クラウス様、お待ちください…」

（クラウス様とキスなんて畏れ多い…それに今、身体が変になってるところにキスなんてされたら、もつとおかしくなってしまういそう♡）

クラウスの手が顎にかかり、綺麗な顔が間近に迫ってくる。

「クラウドさっ…まつ…んむっ、んんん！」

制止の言葉を最後まで言うこともできないまま、クラウドの熱く柔らかい唇が重ねられた。

ちゅっ♡ちゅっ♡ちゅく♡

音を立てて啄むように何度もキスをされる。

（男の人の唇ってこんなに大きいのか？ あっ♡頭の中、ふわふわする…♡）

「はあ、甘いな…」

クラウドの息混じりの声の色つぼくてセーラの心臓がどきりと跳ねる。

「セーラ、口開けて…」

言われるがままに口を開くと、セーラの口の中にクラウドの舌が入ってきた。

「んんんっ♡んん♡」

(あっ♡口の中なぞられるのぞわぞわする♡んんっ♡口の上の方、ちろちろっ♡ってされるのダメ♡)

口の中を舌でなぞられると、触られてはいはずのお腹の下の方が熱くなってくる。刻まれた淫紋のせいで身体中がバカみたいに敏感になっていた。

さらにクラウドはキスをしながらセーラの胸にも手を伸ばす。

「…んんっ♡」

セーラは驚いて思わず唇を離そうとするが顎を掴まれていて動けない。クラウスはその柔らかさを確かめるように服越しにセーラの胸に触れた。

ふにっふにっ♡ふにっ♡

「んっ♡んんっ♡」

（あっ♡胸触られるのもぞわぞわして♡頭がぼーっとしてくる。）

ちゅ♡れろ♡ちゅく♡ふにっ♡

「ふんんっ♡んんっ♡」

胸を優しく触られても口の中を舐められても思考を溶かすような甘い痺れが走る。セーラは我慢できずにクラウドスの胸を押して身体を離そうとした。しかし身体に力が入らず、ろくな抵抗にはならない。

むしろ、弱く押し返したクラウドスの胸板が逞しくて、もうこの手からは逃られないのだと思い知らされた気がした。

（私が嫌がっていることは伝わったはず…いつものなら絶対やめてくれるのに…

ちゅく♡ちゅむ♡れろ♡ちゅっ♡ちゅううっ♡

セーラはクラウドスが満足するまで貪るようにキスをされるしかなかった。

（うう…♡なかなかキス終わってくれない♡）

ようやくクラウドが唇を離れた時には、セーラの白い頬は真っ赤になっていた。

「ふふつ、赤くなつてて可愛いね、セーラ。僕とのキス、気持ちよかった？」

「…はあつ、…はあつ…」

セーラは酸素が足りなくて荒い呼吸を繰り返す。

（クラウド様、どうしてこんなこと…）

「…はあ…はあ……♡クラウド様、おやめください。このままでは聖女の力がますます使えなくなってしまう。それは、国の利益にも、反することのはずです。」

「うん…僕は皇太子だからね。君には聖女としての務めがある、仕方ないことだつて割り切ろうとしてきたんだよ。でも流石にもう二度と会えないなんて言われたら手段を選んでいられなくなつたんだ。」

（クラウド様…そんなに私と会えなくなるのが嫌だったの？）

「それにセーラの力は…」

クラウドは何かを言いかけて途中でやめた。

「いいい？ セーラ。君は難しいことは考えずにただ僕に愛されて、気持ちよくなっていればいいんだよ。」

クラウスはセーラの耳元で甘い声でそう囁いた。耳元に息がかかるだけでびくっとセーラの肩が震える。

「ふふつ、息がかかるだけでも感じてるの？ 次は胸で気持ちよくなろうか。」

クラウスはさらにセーラの法衣をずりおろして、セーラの白く形のいい胸を露わにさせた。それから、クラウスはセーラの胸を両手で包み込む。

「セーラの乳首、まだ僕が触れてもいないのに触って触って♡ってぶつくりしてるね。」

「ちがつ…」

セーラの胸の先端はクラウドが指摘した通り、すでに硬くなり始めていた。

「違わないよ。君が気持ちよくなる準備ができてる証拠だよ。」

くるくる♡すりすり♡

クラウドは円を描くようにして周りには触れるけれど、肝心の乳首にはなかなか触ってくれない。

「ふあっ♡ああっ♡んんっ♡」

（うう♡周りばかり…♡物足りない♡あっ♡もう少し内側を触って欲し

い♡)

セーラは聖女として欲に流されずに生きるよう厳しく言いつけられて育った。普段のセーラなら決してこんなことは思わないだろう。それだけクラウドスにつけられた淫紋はセーラを狂わせていた。

セーラの二つの先端がピン♡とさらに膨らんでくる。

「ふふっ、もつとぶつくりしてきた。触って欲しいの？」

「ふん♡♡うう♡クラウドス様が変な印つけるから…♡」

「そうだね、僕のせいだね。」

クラウドスはどこか嬉しげに笑う。

くるくる♡くるくる♡

クラウスは器用に指を動かして焦らすように乳首の周りばかりを弄ぶ。

「んんっ♡んんっ♡」

（そこも気持ちいいけど、そこじゃなくて…♡あっ♡いま指が掠めたのにつ♡）

切ない声が漏れて、お腹の下がますます熱くなってくる。

「クラウス様っ…♡」

セーラは我慢できなくなってきた、クラウスの服の裾を掴んで潤んだ紫の瞳で見上げた。クラウスはそんなセーラを見て、愛しくてたまらないと言うように目を細める。

「ああ…可愛いな。セーラ。僕にして欲しいことがあるならきちんと行ってごらん？」

「うう…♡」

（自分から言うの恥ずかしいの…♡わかって…♡）

「クラウス様♡♡」

セーラはもう一度名前を呼ぶ。気づいて欲しい♡触って欲しい♡そう思っ

てクラウドスの服を掴んでいる手をふるふると揺らす。

「ふふつ、ふるふるっておねだりするのかわいいけど、それだけだとどうして欲しいのか、僕にはわからないよ。ほら、どこを触って欲しいのか、口に出してごらん？」

クラウドスはセーラの続きの言葉を促すようにくるくる♡と指を動かし続ける。

「…っ♡ ああっ♡ うう…♡」

（クラウドス様、絶対わかってるくせにっ♡ 自分で言うのやだっ♡ 恥ずかしすぎるけど…ああっ♡ もうダメ♡ 我慢できないっ♡）

「クラウド様…そのつ、…私の乳首っ…触って欲しいです♡」

セーラがそう口にすると、クラウドはくすりと微笑んだ。その顔にはセーラが自分の触れ方に屈したことへの昏い喜びが満ちていた。

「おねだりできてえらいね、セーラ。いいよ、たくさんすりすり♡ってしてあげる。」

ようやくクラウドがセーラの乳首に触れた。二つの先端を指で挟んで何度も擦る。

くにくに♡すりすり♡すりすり♡

「ひああっ♡あっ♡そこっ♡ふんんっ♡」

乳首に触れた瞬間、頭の中がじわあっ♡と痺れるような快感が突き抜けた。甘い痺れがお腹の底まで響いて、触ってもらえたことを喜ぶみたいに腰がピクピク♡と動いてしまう。

「お腹すごくピクピクしてる。乳首気持ちいいね。少し強くしてみようか。」

コリコリッ♡コリコリッ♡

「きやう♡ううっ♡」

乳首の先端を指でつまんでコリコリとされてセーラはだらしなない声を出してしまう。

「ふんっ♡うううっ♡クラウドさまっ、乳首、もうだいじょうぶですから♡じゅうぶんですっ♡」

「触ってて言ったのはセーラでしょう？ 本当はもつと欲しいんだよね？」

コリコリ♡コリコリコリ♡コリコリ♡

セーラはクラウドに触ってと頼んでしまったことを後悔した。確かに頼んだのはセーラだけど、こんなにしつこく触られるなんて思わなかった。

（ふあっ♡乳首ずつとコリコリ♡されてる♡♡気持ちいい…♡でも、もつと下…♡熱いところも触って欲しい…♡）

続きをねだるようにセーラの腰がへこっ♡へこっ♡と動いてしまう。

「どうしたの？セーラ。胸だけじゃ足りなくなっちゃった？言っただしょ、して欲しいことがあるならきちんと言ってごらん？」

「ひう♡あんん♡♡クラウドさま♡♡その…」

「いいの、セーラ？何も言わなかったらこのままずっと乳首だけ触り続けるけど…」

クラウドは本当はここを触って欲しいんでしょうと言わんばかりにお腹の下をするつと撫でた。

「…ふあ♡♡んん♡♡」

（ずっと乳首だけなんて…♡乳首も気持ちいいけど、足りない♡淫紋のせいで身体がどんどん熱くなつて♡そこも触ってほしい♡）

「ほら、セーラ。素直になつて？」

くにくに♡くにくに♡

クラウドは先ほどよりも強く押しつぶすようにセーラの乳首をいじる。しかしその指は決して乳首から離れようとしない。

（ああん♡くにくにされるの気持ちいい♡気持ちいいけど、それでも足りない♡もう、焦らされるのいや♡）

「クラウドさま♡おねがい♡お腹の下の熱いところも、触ってください

っ  
♡  
」

セーラは耐えきれずにおねだりの言葉をついに口にした。クラウドは勝ち誇ったように微笑む。

「…うん、よく言えたね。じゃあ、セーラの一番敏感なところ、触ってあげるね。」